

〈書評〉

演劇「人類館」上演を実現させたい会編著 アットワークス

『人類館——封印された扉——』

(一橋大学) 坂元 ひろ子

日露戦争を前にした1903年、大阪で開催された第五回内国勸業博覧会の正門前、場外民間パビリオンとして設置された「学術人類館」に「異人種」とされた人々が連れてこられ、展示された。帝国主義諸国の手法にならったこの企画は、事前に同胞が察知して抗議した清国と朝鮮の人たちについては撤回・撤去にいたるものの、「アイヌ」「台湾生蕃」「琉球」「ジャワ」「[インドの]バルガリー」等の人々は日本帝国臣民の目にさらされるなか、帝国の想像にそう「日常生活」を演じさせられた。憤慨した清国からの留学生らの抗議のありようについては、評者のものも含めた諸論文で取り上げられ、本格的著書、松田京子『帝国の視線』(2003)や呂紹理『展示台湾』(台湾, 2005)も出た。

その事件当時の沖縄からの抗議を軸として、百年後の2003年に関西沖縄文庫に集う人たちが、「人類館」の扉の封印を解いて、そこにはらむ諸問題を問いなおす諸企画を立てた。その取り組みの軌跡を関連資料などとともに記録したのが本書である。研究成果への目配りはされているものの、単なる学術的関心からではないことは明白だ。

このようなプロジェクトを生んだのは、江戸・明治以降の沖縄住民の呻きの近現代史そのもの。とりわけ唯一の地上戦の場に「選ばれた」第二次大戦で辛うじて生存しても、続くは米軍政時代。必死で「祖国復帰」を選択してみれば、その「祖国」日本は全国のわずか0.6%の土地に、75%もの在日米軍基地を主に市街地区におき、多くの女児・女性らが米兵の欲望の犠牲になり、危険な事故が相次いでも、「国の安全」のためと知らん顔。これで住民が憤らないわけではない。「復帰」後、1976年に沖縄の知念正真氏が沖縄語のとびかう演

劇「人類館」を創作、自らの劇団「創造」において県内各地、また東京・大阪でも上演した。

この演劇は、72年の復帰運動に参加した一高校生、内間安男氏のひたむきさを不安ごと見事に撮りきった森口轄(日本テレビ『沖縄の十八歳』1966)氏によるドキュメンタリー『一幕一場・沖縄人類館』(1978)に幸い収められた。劇の主演を演じるのは運動に献身し、挫折も経た内間氏その人だ!この映像化が二十数年を経た2003年末、上記企画での大阪再演実現へと駆り立てたであろう。

多人数による数百頁もの協業の作の紹介は到底、この紙幅内では無理な話。だが、植民地主義の眼差しは被差別者にまでその眼差しを内在化させることで「同化」を選び取らせるという、気の滅入るような差別の連鎖がさまざまに示されていることは確かだ。たとえば沖縄でも、人類館当時、アイヌ・「生蕃」・娼婦らを見下したし、近年でも被差別部落の人たちと「並べられる」ことに県人会が憤るといった歴史をもった。それでも、少なからずの人たちが、強いられた犠牲に憤るだけでなく、自己譴責でもあることによって本土の人間に突きつける刃はいつそう鋭い。魯迅の伝統がここに生きているのだろうかと思える。

本書において、なかでも惹かれたのは、パネルディスカッションで、京都に移って沖縄の「空気」をとり続ける高嶺剛映画監督の「「わからんのしづく」みたいなものが、じゅるじゅると映画からこぼれていく感じて、映画のおもしろさのひとつではないか」(231頁)という発言およびそこに溢れ出る生きざま。これが、演劇「人類館」は「「沖縄を対象化」し「分かつ」とする観客に対して、敢えて「不親切でありつづける」,「人に観ることを許さない。他者を眺めようとする欲望のおぞましさを自体を突き返してくる」(「不親切でありつづけること」338頁)という新城郁夫氏の言とも響きあう。『人類館』を見たいものだ。

(2005年5月刊, 456ページ, 2,310円)